

# 図書館だより

19号

## 「さびしい心臓の所有者」たちへ

図書館長 村田 和穂



いつのころから〈ハート (heart)〉よりも〈マインド (mind)〉のほうが日本でも尊ばれるようになったのだろう。最近そんなことをよく考える。ハートは言うまでもなく心臓のことで、愛や悲しみといった感情が宿る場所と西洋では見なされてきた。一方、マインドは臓器の比較でいうと脳を指し、主に知性の宿る場所と認知されている。我が国で脳死を人の死と認めるかどうかの議論が活発になったのは、確か1990年代初頭だったと思う。それまで心臓の停止により死を定義していたのが、脳機能の停止をもって死を再定義する動きに変わってきたのだ。この背景には臓器移植の問題が密接に絡んでいた。当時学生だった私は、脳死にも臓器移植にもどこか釈然としない妙な違和感を抱いていた。そんな折に読んだのが『「脳死」と臓器移植』（梅原猛 [編]）である。「脳死」が括弧書きになっているのは〈いわゆる〉というニュアンスで、これは編者で哲学者でもある梅原猛の〈脳死は人の死ではない〉という異議申し立てに他ならない。この本は医学、法律、哲学・宗教の立場から総勢16名のそれぞれの分野の専門家が「脳死」と臓器移植に潜む問題点をえぐり出し、ひいては科学万能主義に警鐘を鳴らす論文集で、今読み返しても非常に説得力がある。「脳死」賛成派が反対派を押し切る形で〈臓器移植法〉の成立（1997年）に向けて走り出した頃、ある新興宗教団体による凶悪犯罪が日本で勃発したのは偶然だろうか。高学歴で知性も高いはずの実行犯たちは一様にマインド・コントロールされていたとの報道があった。

ところで、ハートとマインドは英語では明確に区別されるのに、何故か日本語ではどちらも〈心〉と訳されることが多い。このことについてアメリカ文学研究者で詩人の加島祥造が興味深いことを述べている：「（前略）案外この「心」の1語は深くて総合的なものかもしれない。人間の内側では精神も頭脳も、意思と感情も欲望も微妙に複雑につながりあっていて、それらの相互の働きはなまじハートとマインドと分けるよりも、「心」の1語の方が適切な表現かもしれない」（『ハートで読む英語の名言』より）。英語を真剣に勉強した日本人なら大いに頷ける指摘である。また、この〈心〉の持つ総合的な意味合いを誰よりも理解していたのが英文学者でもあった夏目漱石。彼の代表作『こころ』は私見ではハートとマインドの相剋を描いた作品である（だからこそ、題が〈こころ〉！）。文学の授業でこの作品を読んだ学生も多いはずなので、改めて〈心〉、さらには〈頭〉や〈胸〉という語に注意して読み返すと新たな発見があること請け合いだ。

マインドが重視される現代においても、文学者や芸術家は常にハートを大切にしてきた。今回の表題「さびしい心臓の所有者」というフレーズは萩原朔太郎の詩集『青猫』にある。この言葉に出会ったときの衝撃は忘れられない。と同時に、実に翻訳的な表現だとも思った。ずいぶん後になってイギリスのロックバンド〈イエス (YES)〉のヒット曲「ロンリー・ハート」の原題がまさに“Owner of A Lonely Heart”であることに気づき驚いた。マインド・コントロールされ例の事件を引き起こした人たちは「さびしい心臓の所有者」だったのではないか。もっとも、それは私もあなたも大して変わらないかもしれない。人は皆、多かれ少なかれ淋しい存在なのだから。それでも、「ロンリー・ハート」の歌詞にある「さびしい心臓の所有者は壊れた（深く傷ついた）心臓の所有者よりもずっとよい（“owner of a lonely heart (is) much better than owner of a broken heart”）」ことを信じて生き抜いていこう！



## 私のイチオシ



人間・福祉工学系  
メカニクスコース 明石 剛二 先生



『考え方』、  
『稲盛和夫一日一言—運命を高める言葉』  
(稲盛 和夫 著)

皆さん 読書していますか？ 私は、年齢とともに文字を読むことが苦になってきて、本を読む時間がめっきり減ってきました。私の場合、老眼で文字がぼやけて見えにくいだけですが・・・。そのような私が、ある人物が書いた本に興味を惹かれ、老眼鏡を掛けながらでも一気に読み終えることができた本がありました。今回、「私のイチオシ」と題して皆さんへ本の紹介をさせていただく機会をいただき、「イチオシ」の本として、老眼鏡を掛けながら読んだ本を紹介しようと決めて紹介文を書いていたのですが、なぜか無性に、もう一冊紹介できればと欲がでてきました。「イチオシ・ニオシ」？になりますが、ここでは「私のイチオシ」の「著者」と無理やり解釈して、2冊の本を紹介させていただきます。

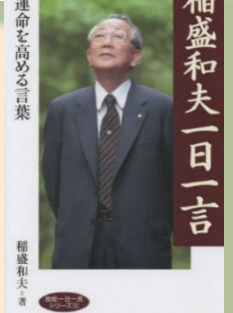
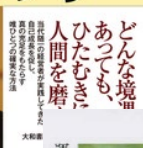
2冊の著者である稲盛和夫氏は、1932年鹿児島市に生まれ、鹿児島大学工学部を卒業したのちに京都の碍子メーカーに就職しています。その後、ファインセラミックスの専門メーカーである京都セラミック株式会社（現 京セラ株式会社）を設立し、2000年には株式会社ディーディーアイ（現 KDDI株式会社）の設立にも寄与しています。さらに、2010年には、政府の要請を受けて株式会社日本航空（現 日本航空株式会社）会長に就任し、再建に尽力するなど数々の偉業を成し遂げた理系の人物です。その稲盛氏は、「経営の神様」と称せられる松下幸之助氏に感銘を受け、松下氏を手本とした経営者の一人でもあります。松下氏は、皆さんもよくご存じだと思いますが、多くの名言を残しています。広く知られている言葉には、「失敗したところでやめてしまうから失敗になる。成功するところまで続ければそれは成功になる」などが挙げられます。稲盛氏も、松下氏と同様に多くの名言を残すとともに、人生の指針を与えてくれる有意義な書籍を多く執筆されています。

稲盛氏の著書の中から『考え方』と『稲盛和夫一日一言』を紹介させていただきます。『考え方』と題されている一冊目の本の帯には、「人生の目的に迷うとき、生き方に悩むとき、心が晴れないとき、支えになってくれる一冊」と書かれています。その本の中に「人生の方程式」なるものが示されています。

人生の方程式 → 人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力

「能力」と「熱意」は0から100点までで示されることができのに対して、「考え方」は「悪い考え方」から「良い考え方」まであり、マイナス100点からプラス100点までの大きな振れ幅があると書かれています。すなわち、どれだけ高い「能力」を持ち、「熱意」があっても「考え方」が間違っていれば、「結果」はマイナスの大きな値になってしまうということです。その「考え方」については次のようにも書かれています。「うまくいかない理由を転嫁して、言い訳と不平不満ばかり言うような「考え方」を持つなら結果はマイナスとなってしまう」と、皆さんの「考え方」は、どうでしょうか。「人生の方程式」を勝手に応用し、「読書の方程式」なるものを考えると、今の私は「読書量が減った理由を老眼に転嫁している」という「考え方」になっており、読書の結果は、大きなマイナスになってしまうことに気づきました。そこで、少しでも毎日活字に触れようと、もう一冊の本である『一日一言』を手に入れました。この本は一日毎に一つの名言が示されており、1年サイクルで繰り返し読むことができ、端的に人生の糧になる本です。なお、本校の開校記念日である4月20日には「謙虚にして驕らず」と題する一言が挙げられています。私には「心に響く言葉」でした。続きは本を手にとってみてください。

社会に出る前の皆さんに読んでもらいたい「イチオシ・ニオシ」？として紹介させていただきました。ぜひ、一度手に取ってみてはいかがでしょうか。





# 私のイチオシ



地域共同テクノセンター  
太田 順一郎 氏

## 『チーム・バチスタの栄光』 (海堂 尊 著)



産学官連携コーディネーターをしております太田と申します。今回、村田先生から「私のイチオシ」に執筆する機会を頂き、感謝申し上げます。先生や学生以外では初めてとお聞きし、誠に僣越では御座いますが寄稿させていただきます。

学生の皆様とは殆どの方が「初めまして」となると思いますので、簡単に自己紹介をさせていただきます。本籍は佐賀県ですが、産まれてから大学卒業迄は東京でした。卒業後に企業へ就職して最初の配属先が大牟田でした。その後東京、北九州への転勤と転職を経て、今は荒尾に20年以上住んでいます。

今回は「私のイチオシ」として推薦する図書との事ですが、正直言って座右の銘や、人生の指針としている「この一冊」となる本は有りません。しかし、その時々で私に解決の糸口や心の支えとなり、強く印象に残った本が何冊か有り、今回はその内の一冊を紹介します。それは海堂尊著の『チーム・バチスタの栄光』です。

舞台は首都圏に在る国立大学の病院。主人公の田口公平医師は、日々を穏便に過ごす事を願っています。その彼がある日突然病院長に呼び出され、院内で起きた不可解な出来事の調査を任せられます。その病院のエースである外科医が組織したバチスタ手術のチームは、過去26回成功していましたが、その後3回立て続けに患者が死亡します。その為次回の手術の観察と過去の術死3件についての調査を依頼されます。

そして手術に立ち会った目の前で4件目の術死が起きます。

事件との疑いを持ちますが、証拠も無いため解決手段を見出せない時に厚生労働省の白鳥氏が登場します。彼はロジカル・モンスターとあだ名を持ち、常にアクティブに行動する性格で、殻に閉じこもる田口医師とは正反対の思考を持っており、二人がこの難問を解き明かすストーリーです。

展開、手術現場のリアリティが秀逸で、生死と向き合う人達の重圧が伝わって来ます。そして問題解決に導く内部監査の手法は、業種は違いますが参考になりました。

この後、2008年には映画、ドラマ化されていて、既に見た方も居られるかと思いますが、どちらも緊迫感が有り面白かったですが、私は書籍で展開の流れを追う方がより刺激的でした。

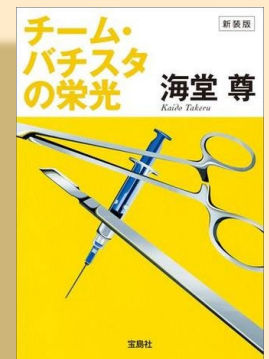
この本との出会いは、2007年に当時私の勤めていた企業で上場する話が持ち上がり、内部監査部門の立上げを任せられた時です。

私はこの本から内部監査の、多面的な視点から問題解決や物事の真理を追究する手法を学びました。対極だけでなく、違う角度から視ると視野が広がる事を経験し、今でも活用しています。

今回読み返して、新たに倫理観について考えました。人の生死が身近になっている医療現場で、人の尊厳が希薄になる怖さを感じました。これは世界各地で起きている戦争で毎日死人が出ていますが、異常と感じない自分自身の怖さにも通じます。

この様な世界で、近い将来AIが人間の能力を上回るシンギュラリティが起こると、人の生命がどう扱われてしまうか不安です。SNSやインターネットで簡単に知識が手に入り、その知識に支配されている人が増えています。しかし、人は知性が知識を上手くコントロール出来なければ暴走してしまい、正しい方向に制御するハンドルとブレーキが倫理観です。

AIに限らず、科学技術に携わる総ての人達が倫理観を持ち、互いに生命を尊重し合う社会が来る事を切に望みます。人が保持し、尊重すべき尊厳とは何かを考えながらこの本を読んでみては如何でしょうか。



## 私のイチオシ<留学生編>

環境・エネルギー工学系 エネルギーコース  
 <留学生> KHIN PHONE SAN (ケイ) さん



### *A Brief History of Time : From the Big Bang to Black Holes* (by Stephen W. Hawking)

『ホーキング、宇宙を語る : ビッグバンからブラックホールまで』  
 (スティーヴン・W・ホーキング著 ; 林一訳)

### 時間の小史 - 私の時間旅行

ホーキング博士の著書 *A Brief History of Time* (『ホーキング、宇宙を語る』) に描かれている宇宙の歴史は広大で複雑である。その本を読むことが私自身の教育の道のりをまた考えさせた。それは単に星や銀河の物語というだけでなく、私にとっては立ち直る力、変化、発見の物語でもある。

その本を初めて読んだのが2018年の大学入学したばかりの1年生だった時だ。そして2024年にもこの本を再び読むことになり今回は有明高専の学生として読んでいたのだ。

しかし失敗したわけではなく時間旅行をしたのだ。16歳のとき、優秀な成績で卒業し、念願の大学に入学した。人生は順調に思えたが、2020年、コロナウイルスの大流行が世界を変えた。2021年、政情不安が私の国を揺るがした。それで国の大学を中退し、留学を決意したのだ。

自活のために働きながら、より良い未来への希望にすぎり、独学で日本語を勉強した。奨学金が私の生命線となり、数え切れないほどの試験の末、幸運にも学費と生活費を100%カバーしてくれる奨学金を受けることができた。こうして私は日本にやってきた。

有明高専に入学し、入学式の日、私は母が恋しくなった。16歳の私は、自立して大人になりたかったが、今20代になってから新しい学校に入学した私は母の存在とサポートがどんなに力になるのかを気付いた。また教室に座っていると、故郷の友人たちが恋しくてたまらなかった。彼らの不在は、私がここに来るまでに歩んできた道程と犠牲を思い起こさせた。

よく「海外で一人で生活するのは怖くないの?」と聞かれるときがある。たしかに恐れはあるが、私にはもっと強いものもある。すべての決断と一歩の背後には、私を励まし、力を与えてくれた人たちがいる。

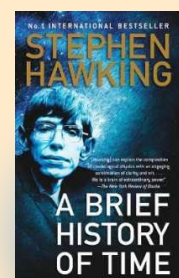
今の私は23歳の高専生になる前いろいろなことを経験していた。音楽教師、英語教師、そして大学生。私は教えるだけでなく、学ぶ方法を学ぶこともできた。教えることで、教育者の心や生徒を育てるために必要な努力を深く理解することができた。こうした経験が、今の私の勉強への取り組み方を形作っている。今思えば、あの頃が懐かしい。しかし、あの頃に戻りたいとは思わない。今、私は新しいタイムラインを迎えている。

日本は、私がかつて手にしたことの無いものを与えてくれる。安全、教育支援、育つ環境、友情、新たな夢、価値観。通学路を歩く小学生を見ると、このような安全がない人たちのことをよく思い出し彼らにも同じ安心感と機会を与えてあげたい気持ちになる。健康保険を使って病院等を訪れるたびに、故郷の両親のことを思い両親も同じ治療を受けることができたらと思う。このような瞬間に、私は今ある資源への感謝の念を深め、賢く使おうと決意を新たにするのである。

スティーヴン・ホーキング博士が説明するように、時間は制約であると同時に贈り物でもある。私にとっては、あらゆる機会を最大限に活用することを思い出させてくれる。私の使命はシンプルでありながら奥深い。今ある資源を使って、自分のためだけでなく、後に続く人々のためにも明るい未来を築くことだ。

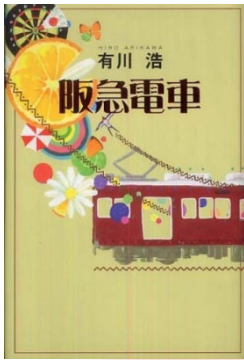
今の私はただの23歳の高専生ではない。立ち直る力、犠牲、そして希望の歴史から生まれた人間なのだ。

私のタイムラインは直線ではないかもしれない。でも進んでいて徐々に上がっている。この本は宇宙と同じように予期せぬ紆余曲折に満ちている人生のことを思い出させた。皆さんも読んでみたら新しい宇宙が生まれるだろう。





## 専攻科生より本科生に薦める 1冊の本



『阪急電車』  
有川 浩 著



7A  
泉 裕介



『永遠の0』  
百田 尚樹 著



7I  
待鳥 佑翔

阪急電車——大阪、京都、兵庫の三県にまたがる大きな路線です。えんじ色の外観にレトロな内装を持つ車両が特徴で、鉄道マニアからはもちろん女性にもかわいいと評判だそうです。そんな阪急電車のなかに今津線という路線があります。駅は全部で8つ、片道わずか15分で走りきってしまう短い区間です。

今回紹介するのは、この今津線を舞台にした物語。電車になぞらえて1駅につき1話描かれています。1話あたり10分程度で読めるので、長い話を読むのが苦手な方にもおすすめです。さらに、個性豊かな登場人物たちも魅力的です。上京してきたばかりの大学1年生や元気な女子高生の集団、図書館通いが趣味のサラリーマンに、高級品ばかりを身に着けたマダム、彼氏からのDVに悩む若い女性やおばあちゃんなどなど。いずれも自分が普段乗っている電車を探せば見付きりそうな人たちが親近感が湧きます。あなたのお気に入りのキャラクターが見つかるかもしれません。電車という密室空間の中で、たまたま居合わせた何の関係もない人たち同士が関わりあってストーリーが展開されていきます。たまたま乗り合わせた電車でも起きそうな出来事が、小説らしくドラマチックに描かれています。

そして、この小説の中で僕が気に入っているのは「折り返し」があることです。終着駅に辿りついたら、電車が最初の駅に向かって来た時とは逆の順番で走り始めます。復路では往路で登場したキャラクターたちのその後の姿が描かれています。往路では関わることのなかった人たち同士が出会い、新たな物語が生まれます。

読み終わった後に優しい気持ちになれるような、心温まる作品です。ぜひ一度手に取ってみることをおすすめします。

私が本科生にお勧めする本は、百田尚樹さんの『永遠の0』です。この物語は、「生きて妻のもとへ帰る」と固く誓いながらも特攻（特別攻撃）に散った祖父・宮部久蔵がどのような人物だったのか、その真実を探る佐伯健太郎とその姉・慶子の物語です。

人生の目標を失いかけていた青年・健太郎とフリーライター姉・慶子は、太平洋戦争で戦死した祖父・宮部久蔵のことを調べ始めます。祖父については特攻で死んだこと以外、何も知られていませんでした。しかし、元戦友たちの証言を集めるうちに浮かび上がった久蔵の姿は、彼らが予想もしないものでした。

宮部は凄腕のゼロ戦パイロットでありながらも、異常なまでに死を恐れ、生に執着していたのです。元同僚には「奴は海軍航空隊一の臆病者だった」とまで言われる始末。生きること執着する彼の姿は、当時の日本軍の風潮では「卑怯者」として蔑まれるものでした。しかし、彼には「必ず生きて帰る」という妻との約束があり、その信念を突き通していたのです。そんな男が、なぜ特攻を志願したのか？

物語が進むにつれて、次第に明らかになっていく事実、ページをめくる手が止まらなくなります。宮部久蔵の人間性や特攻の決断の裏側にある感情が心に刺さり、涙が止まらなくなることでしょう。

私はこの本を読む前までは、特攻に参加した方の気持ちを理解することができませんでした。しかし、この物語を通じて、彼らがなぜ特攻という決断をしたのか、いや決断せざるを得なかったのか、少し理解することができたと思います。戦争を知らない世代の私たちにとって、戦争の悲惨さだけでなく、命や家族の尊さ、生きることの意味について深く考えさせられる一冊です。ぜひ手に取って読んでみてください。



『罪の境界』  
薬丸岳 著



7I  
松永 真樹

私が本科生にお薦めする本は薬丸岳さんが書かれた長編ミステリー小説『罪の境界』です。これは2022年に幻冬舎から出版されました。

物語は、渋谷のスクランブル交差点で無差別通り魔事件から始まります。浜村明香里は見知らぬ男性の飯山晃弘に助けられ、彼は明香里の代わりに命を落とします。最後に晃弘が残した言葉の意味を知るため、明香里は晃弘の過去を調べ始めます。一方事件の加害者・小野寺圭一から取材依頼を受けたフリーライターの溝口省吾は、小野寺の生い立ちや犯行に至る背景を調査します。被害者と加害者、それぞれの視点から物語は進んでいき、事件の裏に隠された真相が徐々に明かされていきます。

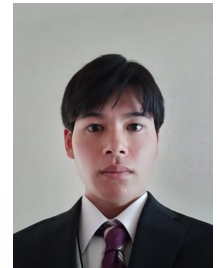
この作品では、主に被害者と加害者の両方の視点で物語が描かれますが、被害者の彼氏の視点でも物語が進むので第三者からの視点でも楽しむことができます。被害者と加害者どちらにも焦点を当てて書かれているので、単純な善悪の枠を超えた興味深い物語になっています。

この作品を読んだとき、単純に面白い、というのが私の感想でした。日常生活において殺人事件などのニュースでは基本的に加害者についての報道がされ、被害者についてはあまり報道されません。この作品では被害者の視点でも物語が進んでいくので事件前と事件後で、どのような心情の変化が起こり、生活などの変化についても書かれています。普段見えない部分の一端をこの作品で読むことができ、勉強にもなりました。

私が考えるこの作品の見どころはやはり、事件後の被害者の心情の変化です。事件が起こった後の被害者の変化にとっても考えさせられる部分があります。非日常の物語を体験できる『罪の境界』をぜひ読んでみてください。



『夢をかなえるゾウ 4  
ガネーシャと死神』  
水野敬也 著



7M  
松井 優樹

突然の余命宣告。残された時間はわずか3ヶ月。平凡な会社員だった主人公は、ゾウの神様・ガネーシャと出会い、人生の意味を問い直す。ガネーシャは主人公に「人生はゲームだ。そして、お前は今、最後のステージにいる」と告げます。限られた時間の中で、本当に大切なものに気づいていく主人公の姿は、読者の心に深く突き刺さるでしょう。

「健康こそが、最大の財産だ」というガネーシャの言葉に、主人公は深い感銘を受けます。ガネーシャのアドバイスのもと、主人公は限られた時間の中で、自分の人生を最大限に生きようとしています。

前作では仕事やお金といったテーマが中心でしたが、本作では「死」という普遍的なテーマを深く掘り下げています。ガネーシャの教えは、シリーズを通して一貫していますが、本作ではより人間的な側面が描かれています。

この物語は、単なるファンタジーではありません。あなたも、主人公と一緒に悩み、考え、成長していくことができるでしょう。残されたわずかな時間の中で、主人公が葛藤し、成長していく姿に、きっとあなたは自分の姿を重ねることでしょ。

自分の人生をもう一度見つめたいと思っている方へ。この物語は、私たちに「今」を大切にすることの大切さを教えてくれます。明日何が起こるかわからないからこそ、今日を精一杯生きることが大切なのです。

忙しい日々を追われて過ごしているあなたも、きっと何かを感じることができるはずです。この一冊を手にとり、あなたの人生を豊かにしませんか？







7M  
徳永 凌麻



『六人の嘘つきな大学生』  
浅倉 秋成 著



6C  
西田 昌平

物語の舞台は、成長著しいIT企業「スピラリンクス」が初めて実施する新卒採用の最終選考。この選考に残ったのは、六人の大学生たちです。彼らに課された課題は、「一カ月後までにチームを作り上げ、グループディスカッションを行う」というもの。全員で協力し合い、内定を目指す中、主人公・波多野祥吾は他の五人と交流を深め、信頼関係を築いていきます。ところが、ディスカッション本番直前に選考内容が変更されます。その新たな課題は、「六人の中から一人の内定者を選ぶ」という衝撃的なもの。仲間だったはずの六人は、一転して競争相手となり、たった一つの内定枠を争うこととなります。

さらに、選考が進む中で六人の間に波乱を巻き起こす事件が発生します。個人名が書かれた六通の封筒が見つかり、その中には「●●は人殺し」という告発文が入っていたのです。この告発文をきっかけに、彼らの過去に隠された罪や嘘が次第に明らかになり、信頼関係は崩壊。内定を巡る議論と平行して、嘘と罪、そして「犯人」の目的を巡る緊迫感あふれる謎解きが進行していきます。

この物語の魅力は、登場人物たちの心理描写です。六人それぞれが異なる個性と背景を持ち、成功への焦りや嫉妬、疑念といった感情が見事に描かれています。高専生の皆さんも、自身の進路を考える中で、登場人物たちの葛藤に共感する場面が多いはず。また、物語全体に張り巡らされた巧妙な伏線は、読者の推理力を刺激し、ページをめくる手が止まりません。

また、この作品は単なるエンターテインメントに留まらず、「信頼」「評価」「個性」など普遍的なテーマを扱い、読者に「自分だったらどうするか」と考えさせる問いを投げかけます。高専生として専門分野を学びながらも、社会に出る準備を進める皆さんにとって、考えさせられる要素が多い作品です。ぜひ手に取り、六人の就活生たちの嘘と真実に満ちた物語を体験してみてください。

私が紹介する本は、『六人の嘘つきな大学生』です。

『六人の嘘つきな大学生』を読んで、私は多くの感情を抱きました。本作には、2人の主人公が登場し、前半は1人目の主人公、後半がもう1人の主人公の視点で描かれています。本作は、六人の大学生がそれぞれ異なる嘘をつきながら、彼らの生活と人間関係がどのように変化していくのかを描いています。

まず、各キャラクターの個性が非常に魅力的で、それぞれが抱える問題や不安が上手く描かれています。嘘をつく理由も様々で、自己防衛や他者を守るため、または単純に自分を大きく見せたいために嘘を重ねています。その中で、彼らがどうして嘘をついてしまうのか、その背後にある心理的な葛藤に共感を覚えました。

本作で特に強く感じたのは、「嘘が引き起こす人間関係の変化」です。嘘が暴かれることによって友情や信頼が崩れたり、逆に嘘をついていた人物が自分自身を見つめ直したりする過程が描かれており、リアリティを感じました。嘘をつくことで一時的には問題を避けられるかもしれませんが、最終的には真実と向き合うこととなります。この点で、人間関係における誠実さの重要性を改めて実感しました。

また、作中の六人が最後にどういった結末に至るのかも注目ポイントでした。それぞれが自分自身の嘘をどう処理し、どう向き合っていくのかという過程が描かれており、彼らの成長が感じられました。最終的には、嘘をつくことで傷つけた人々との関係を修復するために努力する姿が描かれ、感動的でした。

全体として、この作品は嘘と誠実さについて深く考えさせられるものであり、登場人物たちの葛藤や成長を通して、自分の考えを深めるきっかけを与えてくれた本でした。



『君の臍臓を食べたい』  
住野 よる 著



6M  
緒方 天政

『君の臍臓を食べたい』は、住野よるさんのデビュー作として2015年に発表され、瞬く間に話題を呼び、2016年には年間ベストセラー第1位を獲得しました。その後、2017年には映画化、2018年にはアニメ化と、メディア展開が続きました。私は発売当時、小学生で小説を読む習慣がなかったため、作品の人気をニュースで知っていただけでしたが、今回手に取った理由は、当時のことを懐かしく思い出したことと、表紙が美しかったからです。

物語は、病気を抱えた少女と地味なクラスメートが偶然出会い、徐々に関わりを深めていくというシンプルな展開から始まります。しかし、読み進めるうちに予測できない展開が次々と繰り広げられ、最終的には「まさか、こんな結末が待っていたとは…」という驚きが訪れます。最初は少し怖い話を期待していた私ですが、結末は予想を超えて心に強く響き、思わず心が揺さぶられました。この作品は、心の奥底に深く響く感情を呼び起こす力を持っています。特に、情景が鮮やかに描かれており、感情移入しやすい点が魅力的です。また、急展開が続き、ページをめくる手が止まらなくなるスピード感があり、短時間で読み終えることができるため、忙しい方にもぴったりです。

さらに、私は初めに原作を読むことをおすすめします。『君の臍臓を食べたい』は小説、映画、アニメとさまざまな形で展開されていますが、原作が最も作品の魅力を純粋に感じられる媒体だと考えています。映画やアニメでは、どうしても内容が省略されたり膨らまされたりすることがあり、原作で描かれている世界を完全に楽しむことができない場合があります。原作を先に読むことで、登場人物の心情や世界観を深く理解でき、その後映画やアニメを観ることで異なる視点から作品を楽しむことができます。また、映画やアニメで描かれたシーンが、原作の想像をどのように形にしているかを確認するのも、非常に面白い体験です。

この本は、読後に心に深く残る印象を与えてくれます。もし、少し時間が空いたときに心に残る物語を求めているなら、ぜひ『君の臍臓を食べたい』を読んでみてください。



『腹を割ったら  
血が出るだけさ』  
住野 よる 著



6M  
廣田 光稀

この小説は、大学生の「僕」と「彼女」が中心となり、それぞれが抱える心の傷を乗り越えながら、少しずつ他者との関わり方を学んでいく物語です。彼らは、過去の出来事から心に深い傷を負っており、感情を表に出すことに恐れを感じています。そのため、どんなに言葉を交わしても、本当の意味での「腹を割った」コミュニケーションはできずにいます。

私がこの本を読んで感じたのは、心を通わせることがいかに難しいかということです。大学に進学し、社会に出て新しい環境で人と接していく中で、日々新しい人々と出会います。そんな中で、相手の気持ちを汲み取ることや、自分の気持ちをどう伝えるかがいかに大切であるかを痛感します。コミュニケーションは単に言葉を交わすことではなく、相手の心に寄り添い、互いに理解し合うことこそが本当のつながりを生むのだと、この本を通して学びました。

また、住野さんの作品には、タイトルの意味が最後に深い形で明かされる点が魅力的です。『腹を割ったら血が出るだけさ』というタイトルは、一見するとネガティブに捉えがちですが、物語を読み進めるうちにその深さを実感します。感情をさらけ出すことの怖さや痛みを感じながら、それでも少しずつ心を開いていく登場人物たちの姿に、自分の心も動かされました。言葉にすることの難しさ、そしてそれを乗り越えた先にある本当の理解と絆を、この小説は教えてくれます。

人との距離感や、どのように自分を表現するかについて悩んでいる人にとって、この作品は非常に心に響くものがあります。自分の気持ちを伝えることが恐ろしいと感じる時、それでも一歩踏み出す勇氣が必要だということを、登場人物たちの成長を通して実感できることでしょう。人と人とのつながりがどれほど貴重で、時に傷つきながらもそれを大切にすることの意味を教えてくれる一冊です。

最後に、人との関わり方で悩んでいる方はもちろん、順調だと思っている方も一度読んでみると改めて自分のことや周りとの関係を確かめるいい機会になるかと思います。





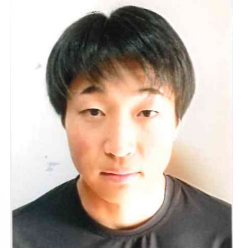
『巧みな質問ができる人  
できない人』  
中島 孝志 著



6E  
内藤 陽大



『自由なサメと  
人間たちの夢』  
渡辺 優 著



6A  
溝田 嵩弥

「ここまでで質問はありますか？」授業でひと段落ついたときや授業の終わりに、先生からよく聞く言葉です。この時に質問が出ることは少なく感じます。なぜでしょうか。最も大きな理由として、日本的な「遠慮の美德」や「こんなことを訊いたらバカにされるのではないか」という気持ちがある、と本で述べています。私もこの本に出会うまでは、積極的に質問をしていませんでした。質問のコツや効果を知ること、質問をするときのハードルは低くなると思います。この本には、様々な例が挙げられています。その中で特に印象に残ったものを2つ紹介します。

まず1つ目は、本当に訊きたいことを訊くためにはどうすればよいのか、についてです。報道番組には、キャスターが質問によって情報を聞き出す場面があります。視聴者が本当に知りたいことを届けるためには、質問をする相手のことをしっかりと勉強することが重要です。大勢の前で質問をするときは、限られた時間であることがほとんどです。キャスターでなくても自信をもって質問するためには、事前の学習が欠かせません。

2つ目は質問をすることの重要性です。とある会社が30億円をかけてインスタントライスの最新鋭工場を作りました。しかし、インスタントライスは即席麺と比べて値段が高く、比較的自分で作りやすいため、注文が低迷してしまいました。「これ、買っていただけますか？」この1つの質問ができなかったために、30億円をドブに捨てたのです。

慣れないうちは質問するのに勇気が必要です。いきなり行動しようとしても、どうしてもできないかもしれません。講演などで質問するのは、難しいなと感じている方に特におすすめの一冊です。ぜひ、読んでみてください。

この本は、『ラスト・デイ』、『ロボット・アーム』、『サメの話』など全7作品からなる短編集です。7作品の中でも初めの『ラスト・デイ』は、「さて、私は死にたい。本当に死にたい。心の底から死にたい。」という衝撃的なストレートな言葉から始まります。自分を偽物だと思い込み、自殺未遂を繰り返す精神病棟に入院中の主人公。退院するその日、主人公はどんな道を選ぶのか注目してください。7作品を通して自分なんてダメだ、何もできないと感じて自己肯定感を持たない主人公たちそれぞれが生きる意味を探し見つけようとしています。一生懸命生きることの大切さを感じられる作品になっています。

この作品では、「サメ」と言う言葉の意味が重要になります。一般的にサメは、海の王者と呼ばれ、カッコいいイメージがありますが人間にとっては恐怖の対象でもあります。この作品では、サメが自由を求め、自らの夢を追いかける姿が描かれており、主人公たち自身が夢を追う姿と重なり共感を呼び起こします。人間たちの中にも自分の限界を超え、新たな挑戦をする者もいれば、逆に夢を諦めてしまう者もいます。しかし、この作品は夢を持つことの大切さ、挑戦し続けることの意義を教えてください。

最後に、この作品は私たちに自然との共生や未知の存在との関わり方についても考えさせてくれます。サメと人間、互いに異なるもの同士が理解し合い、成長していく姿は読者一人一人に感じるがあると思います。死について考えたり、夢に取り込まれそうになったり、サメに救いを求めたりする均衡をギリギリのところを保ちながら、この世界に光を見出そうとするファンタジーでもありホラーでもある不思議な物語。一度手に取ってみてください。



# 2025年有明高専美術ギャラリー作品介绍

## 絵画



『裏川水際(玉名)』  
奥苑 和司



『廃坑』  
藤吉 美保子



『帰り道』  
小柳 規久絵



『ニワトリ』  
東田 久美子



『パンジー』  
上村 恵子

『朝陽を浴びて』  
木戸直道



『タコ干し』  
塚本 和美



『陽だまり』  
横山 多佳枝



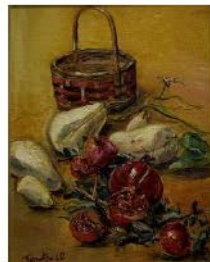
『阿蘇のお馬と  
うさぎちゃん』  
永井 正文



『窓』  
牟田 英昭



『阿蘇・冬』  
牟田 志津子



『柘榴と花てぼ』  
石井 保



『おかまど山遠望』  
堤 和則



『白いカラー』  
田中 栄



『向日葵』  
河上 導道



『かな』  
河島 房子



『水郷』  
松尾 忠之



『花』  
岩本 久子



『硫黄山』  
大山 好美



『ぼけの実』  
黒田 時三郎



『静物』  
春日 重雄



『散』  
清水 正敬



『インドのバナナ、マンゴ売り』  
河野 康子



『鳩を飼う』  
平田 邦之



『曼陀羅II』  
皆島 万作



# 写真



『Umbrella Sky』  
田中 浩久



『静寂な夜』  
浦田 碩也



『有明海展望』  
鈴木 安徳



『雨の繁吹き』  
高口 博文



『豊作祈願の祈り』  
渡邊 精之



『だるまさんが転んだ』  
ふるいけ博文

# 書



『種田山頭火の句』  
川口 少香



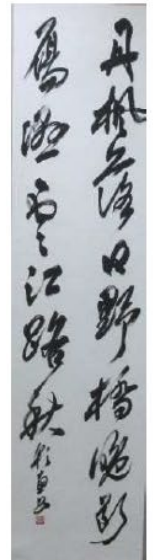
『雨降地上湿』  
川井 遥水



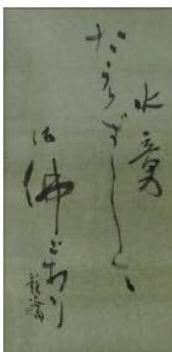
『龍池望五雲』  
田河 琴翠



『官舎迎内子、有庭花開』  
中本 管城



『雲江路の秋』  
本村 彩恵



『種田山頭火の句』  
小柳 少鼎



『山水有清』  
山口 八石



『万葉二歌』  
小柳 少華

今年度（2024年）の8月に本科の2年生は2回目のシンガポール研修を行いました。引率教員の一人が図書館運営室員の鷹林先生でした。その時の体験をレポートします。

## シンガポールの経験を通じた自然観の相違とその理解

今夏、私は2年生のシンガポール研修に同行し、マリーナ・バラージを見学した。マリーナ・バラージは、シンガポール川などの河川が合流したマリーナ湾が、シンガポール海峡に注ぎ込む河口に構築した巨大な堰である。堰で囲った河川側を淡水化し、貯水池としている。

人は、水なしでは生きていけない。シンガポールは熱帯雨林気候に属しており降雨量には事欠かないが、平坦な土地であるため山々からの伏流水や湧水は期待できない。水の大部分は、北端のジョホール海峡を隔てたマレーシアから購入して賄っている。ただしシンガポールという国はマレーシアから分離独立、有り体に言うとマレー系と中華系の民族対立がこじれて結局マレーシアから追放されてきた経緯のため、両国間は今もなお微妙な関係にある。ゆえにシンガポールでは、水確保が国家の命運を決めると言っても過言ではない。ところが私は、マリーナ・バラージの重要性については理解できたものの、その構造物には違和感を覚えた。そんなモヤモヤした心持ちの中、興味深い本を見つけた。それは『矛盾の水害対策—公共事業のゆがみを川と森と人のいとなみからただす—』（谷 誠 著）である。

古来我々日本人は、自然と協調して生きてきた。地震、台風、津波など、現代においても日本列島は自然災害に事欠かない。しかし祖先はそれを克服するために、自然を作り替えるというよりは、協調して受け流す方向に舵を切ってきた。明治維新以降の西洋近代化から現代に至っても、人工的克服に違和感を覚える日本人は少なくないだろう。この感覚は、東洋世界に広げても通じ得るのではないだろうか。

一方西洋世界では、自然の克服を是としてきた。シンガポールは地理的に東洋世界に属する。しかしながら西のマラッカ海峡からシンガポール海峡へと至る東洋の入口という地政学的重要性から、大航海時代より港湾都市として重視されてきた。ゆえにその精神世界は、東洋にありながら西洋であろう。

本書は、ダムなど人工構造物による治水に関して一石を投じている。自然災害は、人間の及ばないところで起きるだけではない。人間の自然への働きかけが切っ掛けとなる場合もある。目前の自然を克服したとしても、自然は後年それを嘲笑うかの勢いで迫ってくる。

人間は、自然から必要な資源を借り受けて生きてきた。現代の我々は自然に恩恵を受けておきながらも、時に迫り来る自然の猛威を受け流すのではなく、西洋的に現代科学を用いて正面对峙する。しかしそれは新たな猛威を産み出すかもしれない。もしくは自然との対立を極限化して、我々自身を破滅に導くかもしれない。

我々の知恵は、数十億年の齢を重ねた自然に対してあまりにも無力である。ならば幾世代にもわたって年月をかけて自然と対話し協調していくのが、遠回りの近道だと考えられる。我々には書物がある。一人の小さな知恵は、書物を通じて多くの次世代に伝わる。その次世代が知恵を重ねていき、続く世代へと繋ぐ。教員はそのような継承の仲介を担っている。一人の人生は短い、繋ぐ人生は長い。

（図書館運営室 鷹林 将）



マリーナ・バラージ（中央の堰）。介して左側がマリーナ湾（淡水）で、右側がシンガポール海峡（海水）。海峡は交通の要衝で船舶が多く見える。



マーライオン前にて筆者と数学科田端 亮先生（右）。マーライオンはマリーナ湾に面して、噴いているのは海水ではなくマリーナ湾の淡水。



# 副艦長の第三艦橋航海日誌

宇宙戦艦ヤマトの艦底にある第三艦橋。海底とぶつかったり、ガミラス星の濃硫酸の海で溶けたりしていつも壊れてしまい何の役に立つかは誰も知らないが、まるでトカゲのしっぽのようにいつの間にか再生する不思議な設備。そんな第三艦橋勤務に憧れる副館長柳原がお届けする読書の海の航海日誌。

諸君、普賢岳が見えるね



魚豊作, ち。-地球の運動について-第7集, 小学館より

久しぶりに本を買ってでも読みたいと思える物語に出会った。きっかけは学会出張から夜分に帰宅し、たまたまニュースを見ようと思ってつけたテレビだった。生憎ニュースではなくアニメだった。サカナクションの山口一郎の軽快なテーマソングからはじまり約30分、そのアニメに見入ってしまった。そのアニメの原作が今回採りあげさせてもらう、

『チ。-地球の運動について-』

である。原作の連載はとっくの昔に終わっているのでも、もしかすると学生のみならず「なんだ、副艦長、今頃？」と思うかもしれない。いつも洋上勤務なので(笑)世情に疎いのは許してほしい。

さて内容は、15世紀のヨーロッパで天動説が絶対であるとされた頃に、夜空を眺めるのが好きだった人々が“実は地球が動いている”のかもしれないということに気付き、精神の自由、思想の自由、いや、こころの豊かさを求めて、真実のために命がけのチャレンジをするというものだった。

ところで、学問や技術開発においては今まで是とされていたものに対して「本当にそうなのか？」と問う、そう、現状否定、つまりチャレンジが必要になる。

あなたが発想し採用したアイデアの根拠が、「今までこうだったから、これからもこれでいいんだ」「司教が、学校の先生が、いや親が、権威がそう言ったから...」であったならば、それは信仰であり、真の答えには届いてはいない。さらにチャレンジ、“深く問い直す”べきだろう。

ところが、一個人が大多数の人が何の疑問ももたずに信じている考え、つまり通念や常識とは異なる考えをもったときに、その人は大多数からは異端として扱われることになるのだが、学問や技術開発に携わってきた人であれば、そのような異端的孤独と多かれ少なかれ向き合うことになる。ゆえに、本作品は、創作の場に向きあったことのある人には“刺さる”ものがあるように見え、マンガからアニメにまで昇華しているのではないかと感じている。

話は戻って、私は毎週土曜日の深夜のそのアニメを見るようになった。しかし物語がすすむにつれて「週末の番組を待つのがもどかしい...」と思うようになった。短気な私は原作全8巻を速攻で買った(笑)。専門書以外で本を購入するのは久々だ。電子書籍のほうが安かったけど(笑)、バッテリー切れで見られなくなるメディアはイヤだったからあえて紙媒体にした。

書籍は、登場人物のそれぞれが語るセリフを聞き漏らすこともなく活字として正確に読めるからいい。視覚から脳に正確に入るそれら登場人物の数々の言葉は、哲学的問いを私に投げかけつつ反芻する余裕も与えてくれる。

考えてみれば、地動説について我々が知るの、せいぜい世界史の教科書の数行であろう。多くてガリレオが宗教裁判にかけられて自説を否定させられ、退廷時に「それでも地球は回っている」と述べたというエピソードくらいであろう。

『チ。-地球の運動について-』は史実をもとにした創作である。だけれども、ある宗教組織が民衆を自分たちに都合良く従わせるために、人々の行動だけでなく精神や思考の自由を容赦なくしかも非情にマインドコントロールしていたという閉塞した当時の社会背景を多くの人にイメージさせながら物語を提示するには、活字だけの情報伝達では困難であり、アニメやマンガという映像メディアの優位性や可能性を改めて感じさせてくれる。

他方、文字を読めない(当時民衆に文字は教えられていなかった)登場人物のボグジーが「文字が読めるって、どういった感じなんですか？」と同じく登場人物のヨレンタに問うが、次に示す彼女の返答が「自由」を得るための基盤としての活字メディアの重要性を我々に気付かせてくれる。

「文字は、・・・まるで奇跡ですよ。」

※ここで言う奇跡とは聖書中の絶対的価値に相当

おっと出港の時刻がきたようだ。諸君、ではまた！ こころ豊かに生きよう。 アディオス！

副館長 柳原 聖

## 編集後記

『チ。』は図書館スタッフも視聴しています。図書館に配架予定の本を手にとるのが楽しみです。さて、今回もたくさんのお話をいただきました。執筆者の方々の心に残っている本の紹介や考え・思いにふれるとその本にとっても興味が湧きます。また、本を読んだ後に記事を読み返すと、お話しをしたことのない方ともなんとなくつながったような気がしてくるのは私だけでしょうか。最近、16号で図書委員のおすすめ本になっていた『世界でいちばん透きとおった物語』を読んでみたのですが、私も紹介者と同じように驚きました。今は本を読む時間がなくても、興味をもった本を心に留めておいて、余裕が出たときに読むと充実した時間を過ごせるかもしれないですね。[図書係 八頭司]